

[特集Ⅰ]

第2コース

「学ぶ立場から教える立場へ 人間形成の場としての授業」

柴田 好章*・山川 法子**
内田 良**・安達 仁美***

1. コースの目的と内容
2. 実施経過
 - 2-1. 日程と概要
 - 2-2. 模擬授業実施までの過程
3. レポートのテーマとその評価
 - 3-1. テーマ
 - 3-2. レポートに対する評価
4. まとめと考察

1. コースの目的と内容

本コースの目的は、生徒が学ぶ側から教える側へとその立場をかえることによって、教師の仕事の一部である「授業」について考える契機を作ることにある。受講者は、学習者として経験してきた、これまでの数え切れないほどの授業経験を振り返り、教える立場から授業のあり方を考えることによって、授業という人間形成の場をとらえ直す。そして、授業を計画・実施するための基本である、教師のねらい・思い・願い、指導技術、子どもの活動、教材の役割、授業の組み立て方などを学ぶ。それらを理解した上で、自ら選んだテーマに沿って、教材や発問等を工夫し、模擬授業を行う。以上の活動を通して、より良い授業を実現するための手だてについて更に考察を深める。受講者は12名であった。

2. 実施経過

2-1. 日程と概要

1日目は、まず前半にオリエンテーションを行った。そこでは、その後のグループワークが円滑になるよう、名札づくりやレクリエーションを通して、受講者の緊張をほぐし、交流の促進をはかっ

* 大学院教育発達科学研究科

** 大学院教育発達科学研究科博士課程

*** 大学院教育発達科学研究科研究員

1日目 (8月2日)	午前	a. オリエンテーション	
		a-1・セミナーの目的やスケジュールの説明	5分
		a-2・名札づくり<個人>、自己紹介<集団>	15分
		a-3・レクリエーション<集団>	30分
		・休憩	10分
		a-4・授業概要の説明<授業者>	10分
		a-5・参加動機を、1人2, 3分で発表<集団>	20分
<ポイント>	名札づくり、自己紹介、レクリエーションで、参加者の心を開くようにする。授業者、TAも、一緒に自己開示のモデリングをする。新たな集団への適応が難しい生徒への配慮をする。		
	午後	b. これまでの授業体験を振り返ろう	
		b-1・印象に残っている授業を想起し、イメージマップ作成<個人>	45分
		授業を中心に、イメージを広げる。	
		紙1枚(スケッチブックを利用)の中心部に「授業」と書き、その周りに、形容詞を思いっつくまま書く。さらに、形容詞に対応した、具体例、条件などを書く。	
		b-2・発表・討論<集団>または<小集団>	45分
		・休憩	20分
		b-3・授業者がなすべき仕事の抽出<小集団>	30分
		大きめの付箋紙を用意し、各自の意見を書く。	
		グループで四つ切り画用紙1枚にまとめ上げる。	
		b-4・発表・討論<集団>	20分
		b-5・論点の整理<授業者>	20分
<ポイント>	b-1では、学習者として授業の負の側面(つまらない、教師が準備しないなど)が出されることが予想される。b-3では、それを授業者側の立場から見直して、授業を行う者の大変さに気づかせていく。		
2日目 (8月3日)	午前	c. 授業の設計・実施・評価と授業者による模擬模擬授業	
		c-1・授業者の仕事、授業の設計・実施・評価という点から捉えた上での講義<授業者>	60分
		・休憩	10分
		c-2・授業者による模擬模擬授業「FAXのしくみ」<授業者>	50分
<ポイント>	c-1では、前日に授業者から出された意見を取り入れながら講義する。 c-2では、最終日に受講者が行う模擬授業のイメージをつかませる。		
	午後	d. 授業設計	
		d-1・模擬模擬授業の解説と模擬授業実施にむけた説明	30分
		d-2・教科書・教材からの関心テーマの拾い出し<個人>	40分
		スケッチブックに各個人の関心テーマを書き出す。	
		各個人の関心テーマに基づいて4人ずつ3つの班に分ける。<授業者>	
		d-3・模擬授業のテーマ選定<小集団>	30分
		班毎に話し合い、模擬授業のテーマを選定する。	
		d-4・教材研究<小集団>	80分
<ポイント>	c-2の模擬模擬授業において、授業案、教材準備などについて解説する。 すべてグループ単位の演習で行う。3～4名の3グループに分け、授業者、TAが、指導する。 模擬授業は、概念を獲得させる、イメージをふくらませる、など、学習者の内的な変化を授業者の働きかけによって起こすようなものにする。(考察を深めることができるような題材を選ぶようにする。) 教科書や授業の参考図書を豊富に用意しておく。		
3日目 (8月4日)	午前	e. 模擬授業準備	
		e-1・授業準備<小集団>	120分
		指導案の作成。および、OHPやワークシートなどの作成。	
<ポイント>	学習者の反応を予想させる。それに応じたシミュレーションを行わせる。		
	午後	f. 模擬授業実施	
		f-1・グループ毎に、10～15分程度の模擬授業を行う。	60分
		f-2・反省会	30分
		f-3・記念撮影、修了書授与	30分
<ポイント>	教材が、受講者にとって既知の場合は、生徒になったつもりで模擬授業を受けるようにさせる。		

た。後半は、受講者がこれまで受けてきている授業を各自に想起させ、思い浮かんだ「授業」というもののイメージと、授業者がなすべき仕事について、数人でまとめさせた。これは、授業を行う者の大変さに気付かせることが目的である。

2日目は、前半において、授業の設計・実施・評価という流れを理解させるために、授業者が講義及び模擬模擬授業（模擬授業の模擬）を行った。これは、受講者が最終日に行う模擬授業のイメージをつかむことを目的としている。後半は、本コースの主要内容である模擬授業の作成の設計段階に入った。まず、用意してある教科書等から、受講者各自が関心をもつテーマを選択させ、関心の共通する受講者同士で授業を設計できるよう授業者が班を構成した。それらの各班においてテーマの絞り込み及び教材研究を進めさせた。

3日目は、前半では、2日目後半で構成した班において、模擬授業の準備を引き続き行わせた。その間、各班に一人のティーチング・アシスタント（T.A.）が付き、受講者の相談に応じ、助言を行った。後半は、各班の模擬授業を実施した。

<準備物>

コース全体用（教材等）：小・中・高等学校教科書および学習指導要領、指導案作成参考書。

コース全体用（文具等）：スケッチブック、ボール紙、画用紙、のり、はさみ、マジック、付箋紙、安全ピン、セロテープ、下敷き用紙（コピー用紙包み紙）、カッター、ホチキス、道具箱。

模擬授業用：模造紙、ビニール袋、OHPシート、マグネット（棒状（白）、粒状）、ホワイトボード用ペン、定規、バケツ。

レクリエーション用：風船、割り箸、笛。

機材：液晶プロジェクター（OHC一体型）、スピーカー、コピー機、パソコン（インターネット利用）。

※研究用：デジタルスチルカメラ、MDレコーダーセット（マイク、予備充電電池）、ビデオカメラ。

2-2. 模擬授業実施までの過程

本コースの主要内容である「模擬授業」（2-1. 日程と概要の表のd～f）では、まず各自が行いたい模擬授業のテーマをスケッチブックに書き留め（d-2）、関心の共通する受講者同士で4人ずつ3つの班を構成した。班に分かれた後、各班の中で互いに自分の関心を伝え合うために、簡単なプレゼンテーションを行った。さらに各班で一つのテーマに絞り込み、協力して模擬授業へ向けての準備を進めた（d-3、d-4）。以下に示すのは、各班の準備段階から模擬授業実施までの過程である。

<A班の活動>

●班の特徴

本班は、国語の教科書に現在掲載されている教材を用いて模擬授業を行うことに、共通の関心を持つ受講者4名（男子2名、女子2名）で構成された。

●目標とする授業像

詩の表現技巧を暗記させるのみで終わらせるのでは、興味をひく授業にならないため、作品の鑑

賞・解釈に重点を置き、その上で表現技法を理解させるという授業を設計する。

●模擬授業の計画段階

当初4名からは、それぞれ関心のあるテーマとして以下の案が提出された。

- ・詩を鑑賞、解釈することを通じた表現技法の習得。
- ・方言の比較による言葉に対する関心の深化。
- ・古文に対する興味の引き出し、あるいは、音楽全般。
- ・役割演技を取り入れた物語文の理解。

本班は、テーマに「詩」を選択するに至ったのだが、初めはほとんど話し合うことなく、すぐに一つのテーマ（詩）に集中した。そのため、T.A. は、各自の関心テーマを再アピールすることを促した（ゆさぶり）。また、4人の共有の関心が国語にあることも指摘した。その働きかけにより、彼らは全員の関心テーマを検討し直した上で納得し合い、決定に至った。ここでの見直しにより、各自の授業アイディアが出され、今後の授業案作りへの方向づけがなされた。

彼らは、当初は意見の交換をするというよりも、譲り合いをし過ぎる傾向があったが、全員が自分なりの意見を出し、話し合いを活発に行うことができる資質を有していた。テーマ選択時のゆさぶり以降、班員のみで、充分に、教材研究（詩の解釈）、発問の作成と予想される反応を想定し、全体の授業の流れを組み立てることができていた。特に教材研究では時間をかけた熱心な話し合いが行われ、教材である詩の解釈が深められていた。

そのような中で、T.A. の助言と授業案の方向性との関連について、以下に記すこととする。

・テーマ決定段階：班員の共有の関心は国語にあったが、そのうち音楽を扱ってみたいという一人の意見を単に却下するだけでなく、授業の中で一つの補助的な教材として用いることも可能であることを指摘した。それを受け、テーマを決める際に考慮された。また、テーマ決定後にも、教材の理解を促す授業方法を探求する示唆となったようである。

・教材選択段階：多数の国語教材の中から、詩を選択するのだが、模擬授業時間と内容量との均衡に対する観念が不足していたため、それへの考慮を促す助言をした。それを受け、限られた時間内で授業を行うための適切な教材選択をするために、検討がなされた。1つは、多数の教材（詩）を用いた比較による授業、もう1つは、一つの教材をじっくり扱う授業である。結果、後者に決定した。

・構想段階、具体化段階：授業の流れや発問については計画が練られていたが、授業を行う前に、具体物（画用紙や音声（MD）など）の準備をする方法も考える必要があることを伝えた。それを受け、授業の流れと準備すべきものを対照させ、必要な事物を具体的に考えて書き出し、実際に準備した。また、教材研究に必要な情報の収集について、事典が用意できない場合、インターネットで検索するなどの方法があることを助言した。本授業準備では受講者が検索不可能なため、T.A. が準備した。以上のような助言を受けた受講者は、考察を通して、授業者が時間や労力をかけなければ、授業を成立させる準備が整わないことが理解された。

●模擬授業の実施段階

「詩を味わおう！」 中学2年 国語

ねらい：「春よ、来い」を題材にして、あまり意識することなく歌って知っていた歌の歌詞を、表

現や言葉の選び方などの点から吟味することで、作者の春の捉え方を感じて、改めてその歌詞の良さを知る。

授業の流れ：

1. 詩のタイトル「春よ、来い」を提示

タイトルから浮かぶイメージを生徒に考えさせる。この間、詩の内容には触れさせない。

2. 詩の作者の紹介と、「春よ、来い」の楽曲を鑑賞

1. で挙げられたイメージと楽曲を聞いた後でのイメージとに違いができたかを問い、意見を述べさせる。まだ、詩の内容は示さない。

3. 詩の全内容を提示

模造紙に記した詩の全容を黒板に貼って提示し、全員で詩の全容を把握できるようにする。

4. 詩を解説

詩を班員4人で交代に解説する。詩の解釈では、ただ説明をするのではなく、学習者に問いかけ、考えさせながら、鑑賞していく。詩中にある「沈丁花」については、カラー写真を提示し、イメージを膨らまさせる。また、詩の表現技法である、体言止めや擬人法などの効果について、使用されている部分を鑑賞することによって実感させる。

5. 全員で「春よ、来い」の楽曲を合唱

詩全体の持つ味わいを歌うことによって感じさせる。

準備物：「春よ、来い」の楽曲（MD）、詩（教科書の代替物としてのプリント）、詩を大きく書いた模造紙（提示用）、棒状マグネット（白；模造紙貼り付け用）、マジック（模造紙への書き込み用）。

●考 察

本班は、教材研究において、班員全員で意見を出し合い、深い解釈を付すことができたが、その内容を十分に授業で活かし切れず、班員（教師側）の解釈を生徒側に押しつける形で授業を展開してしまった。構想段階において、具体的な発問と、それに対する生徒の反応は想定できているのだが、模擬授業において、想定通りの反応が得られず、利用できなかった。そのことから、発問の難しさと想像通りの流れにならなかった理由について気づき、どのような発問の仕方をするか、生徒側に詩の内容の鑑賞や理解を深めさせることができるか、教材研究の成果を効果的に利用できるかについて、実施した授業を省察することが、不可欠であろう。さらにいえば、補助的な教材・教具（楽曲や写真など）を取り込んでいたのだが、それらの扱いに関して、“利用の仕方”および“授業の流れにおける位置づけ”の適切性についても振り返ることによって、授業全体の構想について考察を深めることが期待される。

他方で、教材を活かすための楽曲や写真などの補助的な教材・教具を取り込んだり、詩を前もって模造紙に書き込み、教科書を見るために生徒が下を向くのではなく、全員が前を向いて意見が出せるような配慮がなされている。また、模造紙を黒板に貼るためのマグネットは、カラーの丸い形状のものではなく、白い棒状のマグネットが使われたのだが、それは白地の模造紙に対する視覚的な妨げにならないよう工夫されたものであった。全体的に見て、4人のアイディアが充分に出し合われ、一つにまとまった構想が練り上げられたと言える。

（山川法子）

<B班の活動>

●班の特徴

本班は、理系科目（算数、数学、理科）の模擬授業を希望する受講者4名（男子3名、女子1名）から、構成された。かれらは皆、自身の出身校においても理系コースに所属している。

●目標とする授業像

算数や数学は、普段の授業では数字や数式で考えるだけ、公式を暗記するだけであることが多い。このとき視覚的な効果をもつ平面や立体の模型を利用すると、生徒は授業の内容を理解しやすくなる。

●模擬授業の計画段階

4名からは、それぞれ関心あるテーマとして以下の案が提出された。

- ・図形をととした漢字の成り立ちの理解あるいは算数（とくに小学校低学年）の図形的把握。
- ・算数の図形および計算。
- ・図形を用いた公式の成立過程の理解。
- ・数学または理科全般。

各自の関心を発表して意見交換をおこなった結果、各自が数学への関心を共通に有していることが確認されたため、数学の模擬授業を進めることが決定された。さらに当初から、数学の授業を展開したいということ以上に、数学の内容を公式レベルではなく、視覚的にわかりやすく把握したいという方向性が確認・共有されていた。それは、模擬授業の実施段階に至るまで一貫していた。

そうした意思のもと、小学校・中学校の教科書を参考にどのような題材を扱うのかについての、検討を始めることになった。その初期の過程では、題材がすぐに決定されるということではなかった。むしろ自分がどのような数学教育を受けてきたのか（受けているのか）、あるいはその点に対してどのような不満点があるのかについて、経験談が和やかな雰囲気のもとで自由に話し合われ、交流が深められていった。

具体的な題材を決定するにあたっては、方向性が定まらない場合のことを考えて、T.A. はひとつの題材を念頭に置いていたが、それは話し合いの過程で受講者の側からアイディアのひとつとして提案された。それを含めて、複数の教科書から5つ前後の題材が選出された。T.A. は、それらの題材で実際にどのように視覚的な授業が実施できるのか、そしてまた利用できる教材や授業時間の制約などはないのか、何年生に向けた授業なのか、といった発問を用いて、円滑でわかりやすい授業を運営するための、大まかな方向付けをおこなった。こうして、それぞれの題材について具体的な検討が深められ、その結果、中学3年生向けの授業という前提で、題材が2つに絞り込まれた。

そのひとつが、正方形の図形を分割して並べ替えると面積が変化するように錯覚する仕組みについてであり、もうひとつが、錐体の体積を求める公式の仕組みについてである。それぞれに、「64→65?」、「3分の1の理由」という、興味を惹くタイトルが付された。

翌日には、各自がさらに洗練した考えをもちより、より具体的な授業進行案を話し合った。間もなくして、授業をおこなうための模型づくりが進められた。「64→65?」と「3分の1の理由」を、それぞれ2人ずつで担当することになった。ひとたび模型づくりに入ると、作業はほぼ順調に進行した。模型づくりには、分担作業が必要とされてくる。当初から積極的であった受講者はいうまで

もなく、発言の点ではやや消極的であった受講者も、協働するために積極的に意見を交わす姿がみられた。「3分の1の理由」では、(授業では水を用いるため)耐水性のある立体をつくらなければならないという課題を、当日の素材に大きな制約があるという状況下で、アイデアを出し合い困難を乗り越えた。また「64→65?」では、制作作業そのものは比較的容易であるために、色彩豊かな視覚的に理解しやすい模型をつくることができた。

●模擬授業の実施段階

「図形」 中学3年 数学

ねらい：生徒が算数や数学のおもしろさを知ることができる

授業の流れ：

実際の模擬授業もまた、それぞれ担当の2人が中心となって、進められた。「64→65?」では、教師側の模型と同じものを、生徒側にも2つ用意し、2つのグループに別れて実際に謎を解いてもらうという課題を与えた。まずは正方形の面積を計算してもらい、続けて正方形を4つに小さく分割し、長方形(に一見するとみえる形)をつくるよう指示し、その(疑似)長方形の面積を出してもらった。生徒側は、(疑似)長方形の面積が64になってしまうことに疑問を抱いたが、その謎は解けないままであった。教師側は、ホワイトボード上で模型を用いて視覚的に考察することで、面積の擬似的変化の仕組みを説明した。

「3分の1の理由」では模型は教師側に一組用意されただけであるが、それを生徒側に示しながら、「64→65?」と同様に生徒側に発問を与えるという方法をとった。まずは、2つの三角柱を提示し、そのうちのひとつを3つの三角錐へと分解した。その三角錐のひとつの内部に水を注ぎ、もうひとつの三角柱の内部へと移し変える作業を3回おこない、その結果三角柱がちょうど水で満たされることを視覚的に明らかにした。その後、三角柱の体積の3分の1がなぜ三角錐の体積に相当するのかを、底面積と高さの関係をいながら説いた。この課題では、授業の計画段階において、模型づくりに手間がかかったために、具体的な解説方法を熟考する時間を欠き、生徒側に説得的な解説を与えることに苦慮する場面があった。

●考 察

計画段階の時間的制約と利用可能な素材の制限によって、与えられた時間は模型づくりに費やされてしまい、その結果として、視覚的な訴えとしては十分であっても、教師自身の数学的な理解が不十分なままに生徒に説明を与えることになり、生徒の数学的な理解を高めるには困難が生じるという事態が見受けられた。しかしながら全体的にみると、本班は比較的順調にかつ和やかな雰囲気の中かで、模擬授業の設計と実施ができたように感じられる。当初から班全員の意味が共通していたことと、模型づくりの段階において協働を必要としたことが、班全体としての課題遂行意欲を高め、それが順調な課題達成を導いたものと考えられる。

(内田 良)

<C班の活動>

●班の特徴

班の構成員は男子1名、女子3名の計4名である。女子3名は、英語を得意教科としており、模

擬授業では、教科書の会話文を使った英語の授業を構想していた。一方、男子1名は、英語が苦手であり模擬授業では、教科ではなく身近な題材を取り上げた総合的な学習のような授業を希望していた。

●目標とする授業像

「英語の授業」を「国際理解の授業」と捉え、英文法などにこだわらず、身近なものを題材として取り上げることで、英語が苦手な人でも楽しめる授業にする。

●模擬授業の計画段階

本班は発言が消極的な受講者が集まったために、話し合いが深まるまでに時間がかかった。授業の構想が決定するまでは、T.A. が意見の共通点を指摘し、問いかけや助言をするなどして話し合いの活発化を図った。しかし、T.A. の助言を熟考することなく、そのまま授業設計に取り入れられる形となったため、後半は各自の考えを引き出すための問いかけのみとし、模擬授業の方向性を示唆するような助言は控えた。

はじめに各自が考えた授業を提示し合ったところ、英語の授業を希望するものが多かったために、教科は英語に決定した。また、身近な題材を扱いたいという意見も取り入れられ、どの単元を扱うかについては、教科書を参考にしながら考察がなされた。身近な題材として、英語で絵日記を書くというアイディアが出されたが、「絵日記を使って英語を教える意義がわからない」という意見から、自分たちが「何を伝えたいのか」という議論へと変化していった。たとえば、「学校の Reader の授業って単語訳して文を訳して、何するっけ？」と、実際学校で受けている授業を想起し、「楽しいってというか微妙、ただしゃべっているだけ」と振り返ることで、どのような授業が楽しいかについても考えるきっかけとなった。

こうしたきっかけを経て、教科書中の、アメリカ版の絵文字メールや、手話さらに点字へと関心が向かい、日本と外国のコミュニケーション文化の違いにも注目するようになった。英語が苦手でも、コミュニケーションの違いについてであれば取り掛かりが容易であることに着目し、コミュニケーションの中でも、特に言語文化の違いについて扱うことで合意した。普段何気なく使っている言葉の中に国外から移入した言葉があり、日本語との共通点や相違点を知ることによって身近にあるものの「違い」を発見する楽しさを知ることが授業のねらいとした。

翌日、班員の一人（男子）が自宅から授業において十分に利用可能である外来語辞典や絵本などを持参し、授業構想の詳細を立案していった。各自が考えてきた授業案を出し合った結果、まず、身近な外来語をいくつか取り上げることから授業を始め、日本語と英語のアクセントによる意味の違いや派生語の品詞における共通点などを中心にして授業を展開することを決め、英語の教科書に掲載されている絵文字や、点字の国家間の違いについても授業の最後で触れることにした。授業の大まかな構想が決定すると、男子がリーダーシップをとって話し合いを進めた。授業を4段階に設定し、それぞれの段階はアイディアを提案した者が担当することになった。各自が担当部分の教材を作成し、最後に授業の詳細部分を全員で確認した。

●模擬授業の実施段階

「日本語の中の外国語」 中学生 外国語
ねらい：日本語と外国語の違いを理解する

授業の流れ：

1. 身近にある言葉・外来語

知っている外来語を発表してもらい、外来語が載っている絵本を見せることを通して外来語が身近な存在であることを認識してもらう。また、外来語がどこの国の言葉であるかを問い、正しい日本語に訳せるか考えてもらうことで、外国と日本の言葉や文化との関わりについて関心を持ってもらう。

2. 日本語と外国語のアクセントの違い

日本語で書かれたカード、英語で書かれたカードを見せ発音してもらうことを通して、同じ言葉でもアクセントが違うことを説明し、言語によって発音の点でも違いがあることを知ってもらう。

(例：エレベーターと elevator の発音の違い)

3. 派生語から見た日本語・外国語

派生語とは何かを問い説明をする。また、英語の派生語の例を挙げ、日本語と比較をし、派生すると品詞が変わる点で、日本語と共通していることを説明する。外国語と日本語との相違点だけでなく、共通点もあることを認識してもらう。

4. その他の日本と外国との違い

絵文字やジェスチャー、挨拶なども日本と外国では違うという例を挙げ、言葉だけでなくさまざまな「違い」があることを伝える。身近にある「違い」を発見する楽しさを知ってもらう。

●考 察

授業を構成する場面で、班員の一人(男子)は、中学・高校と総合的な学習を経験しているため、通常の教科の授業ではない国際理解の授業に対するイメージを持つことができたが、他の3名(女子)は総合的な学習は未経験のため、授業をイメージするのが困難であった。このように、女子たちの発言が消極的なため、男子の意見がそのまま授業に反映されることが多く、その男子は遠慮してアイディアを出すことをためらう場面が見られた。課題レポートには「机を隔てたコミュニケーション」という題目で、班員とのコミュニケーションの難しさ、また、世代や立場を超えて授業を行うことの難しさを述べており、お互いの距離を近づける学習方法の提案をしている。模擬授業の体験を通してだけでなく、受講者同士の関わり合いからも、学びがあったといえる。

また授業の実施段階では、4つに授業を分け担当者を決めたことで、各々が担当部分の準備に終始してしまい、実際に授業を行うと小間切れの授業となり、全体としてのまとまりを出すことができなかった。しかし、絵本や視聴覚機器を利用し関心を引こうとするなど、授業を受ける側の立場に立った工夫が見受けられた。授業を受ける側が楽しめる授業にしたいという班の願いが反映されていたものといえよう。

(安達仁美)

3. レポートのテーマとその評価

3-1. テーマ

3日間のコースを終えた後、模擬授業をすることにより教える立場に立ってみたことを振り返り、①感じたこと、また、②それをふまえて授業や教えることについて、さらに考えてみたことや調べて

みたことについてまとめるというレポートを課した。

本テーマは、模擬授業への振り返りを通して、より良い授業を実現するための手だてについて更に考察を深めることを意図したものである。

3-2. レポートに対する評価

本コースの受講者は、多くが教員志望であり、「教育」に興味を持っている者が多かった。そのため、課題に対するレポートには、受講者が行った模擬授業への振り返りと改善案、および今後の見通しが、具体的に記されることが期待された。確かに、提出されたレポートの中には、模擬授業を詳細に振り返り、指導案を再作成してきたものもあった。しかし、授業をするという良い経験ができた、といった感想にとどまるものも多くあった。これは、授業をするということが初めてであるために、その印象が強くなり過ぎたということも一因であると考えられる。ただし、具体的な振り返りや改善、見通しには及ばなかったものの、視点を変えることができ、興味深かったという感想は多く、教えるという立場について考察する端緒にはなり得たと言える。

また、同じ目的を持つ友人がたくさんでき、今後学んでいくにあたり、励みになっているという者もあり、このことは、本コースが当初設定した意図を超えて大きな効果を受講者たちに与えたことを示している。

今回は、レポートテーマと提出された内容に多少の差異があった。したがって、テーマに即した内容となるよう図るには、どのような指導や助言をすべきかを検討することが今後の課題である。

4. まとめと考察

この高大接続プロジェクトは、今回が初の試みであり、スタッフ皆が手探りで、企画・運営を進めていったものである。本コースもまた、企画段階において運営案を検討したにもかかわらず、当日には、さまざまな問題に直面し、臨機応変の対処が要求されることもしばしばであった。そうした経験から浮かんできた反省点のいくつかを、本コースの報告を終えるにあたって示しておきたい。

まず、授業者側（企画・運営側）の準備・設営についてであるが、受講者が教材研究をする際の情報収集のため、図書館やインターネットが利用できる環境を整えておく必要があった。今回は、受講者が必要とする情報の一部については、T.A. が臨機に対応し、情報や資料の提供を行なったが、情報収集は授業準備の一つとして重要なものである。受講者自身の教材研究を充実させる環境の整備が、必要である。

また時間運営の点について、本コースのもっとも重要なテーマである「教える」立場の認識が、時間的制約のもとで、幾分粗い状態にとどまる結果となった。したがって、模擬授業にかける時間を多くとる必要があるだろう。模擬授業後に自身の班ならびに他の班の授業を振り返って相対化するための時間も必要である。今回は、模擬授業を省察するという時間枠を予定していたにもかかわらず、その時間的余裕が全くなかった。課題レポートにおいて自身の模擬授業を反省し・改善案を作成した受講者もいたが、授業をしただけにとどまらず、反省的に振り返ることをとおして、「教える」立場への理解をより深めていくことができることを、受講者全員に周知し、その機会を設けることが必要であったといえよう。

授業をするということは、ただ相手に何かを伝えるということだけでなく、相手側に内的な変化や反応を引き起こすという行為を含むものである。受講者たちは、そのことに気付いてはいるものの、これを実現するのは難しいことである。こうした授業の難しさを自覚するためにも、上述したように、模擬授業実施後に自身の授業を省察する時間を設け、より具体的に「教える」立場についての認識を深められるようにするべきであろう。

とくに重要と思われる反省点は上記のとおりであるが、これらはまさに初の試みゆえに、浮かび上がってきた貴重な財産である。概ね本コースは予定どおりの内容を受講者に提供することができたものの、このプロジェクトをより意義のあるものへと発展させていくために、真新しいこれらの財産を、今後十分に活用していくことが望まれる。